

## 熊本城の防衛術

—城と城下を防衛の視点から考える—

熊本城調査研究センター 鶴嶋俊彦

### 1 城の本質と属性

#### (1) 城の本質

戦国時代は武力による城取り合戦（領土紛争）が続いた時代

- ・籠城は当知行への執着⇔「下城」は知行権の放棄
- ・援軍無しの籠城なし
- ・「城取り」（城づくり）は、「国取り」（国づくり）

⇒城は当知行（実効支配）の根源となる軍事施設

国（所領）の知行には本城と国境の支城による現実的な支配が必要

豊臣秀吉⇒徳川家康の城郭整理（政策）は、紛争終結によって「無事」（平和）を希求

徳川幕府の「一国一城」制は、居城の固定化と支城の廃止 ⇒領土紛争の抑止へ

#### (2) 城の属性

城は兵と兵器を常備しておく空間

寡兵で防衛可能な方策を工夫

◆城の要点は籠城を支える強固な防衛と十分な兵糧

➡石垣・濠・土塁・櫓・門からなる「縄張り」と食糧庫・井戸の重要性

\*敵を遠ざける堀・濠・高石垣

\*守兵を護り敵を攻撃する矢狭間・鉄砲狭間・石落とし

\*敵兵を側面から射撃できる防御線の折れ

\*敵の前後左右から弱点を射撃できる屈曲した通路＝「枡形」

\*敵兵を上方から射撃可能な櫓

\*出撃を目的とする外枡形や馬出

◆城下～天守に至る重層的防御空間

\*惣構➡三の丸➡二の丸➡本丸の重層的な空間配置

\*川や湿地、崖などの自然地形も防御に利用（⇒人工的障害物の石垣・濠・堀に発展）

### 2 城と城下の防衛術 熊本城の場合

#### (1) 城下外縁からの侵入への対策 [河川・橋・門・枡形の多重配置]

##### ①南からの侵入対策

A 石塘⇒古町木戸⇒坪井川（濠）⇒新三丁目門⇒新一丁目門⇒「宮内江出ル冠木門」

⇒西大手門（西出丸）⇒頬当御門櫓⇒数寄屋丸櫓御門⇒耕作櫓御門〔本丸上段〕

一部に旧薩摩街道や豊前街道二の丸コースを含む

- B 石塘⇒古町木戸⇒下馬橋（坪井川）⇒花畑出口枡形⇒山崎口枡形⇒元札櫓御門⇒札櫓御門  
⇒地蔵櫓御門⇒耕作櫓御門〔本丸上段〕 古町・船場経由コース
- C 山崎周辺⇒下馬橋⇒花畑出口枡形⇒（南坂）⇒南大手門⇒頼当御門 藩主登城路

## ②西からの侵入対策

- A 惣構え濠⇒高麗門⇒新一丁目門⇒「宮内江出ル冠木門」⇒西大手門⇒頼当御門
- B 惣構え濠⇒二ノ勢屯⇒一ノ勢屯⇒（薬師坂）⇒宮内江出ル冠木門 豊前街道に利用
- C（井芹川）⇒（槇島坂・砂薬師坂）⇒（漆畠）⇒二の丸御門 豊前街道三の丸コース

## ③北からの侵入対策

- A 豊前街道 出京町構え⇒京町空堀「構え口」⇒新堀空堀「新堀櫓御門」⇒埋御門⇒西大手御門  
⇒頼当御門櫓⇒数寄屋丸櫓御門⇒耕作櫓御門⇒闇御門⇒御殿玄関 式礼の路？
- \* 新堀櫓御門⇒二の丸御門⇒二の丸⇒「宮内江出ル冠木門」⇒新一丁目門 豊前街道二の丸コース

## ④東からの侵入対策

- A 豊後街道⇒建町構え（外坪井惣構え堀、土手）⇒内坪井構え口（惣構え濠）⇒（観音坂）  
⇒新堀空堀「新堀櫓御門」⇒埋御門 豊後街道コース
- B 内坪井から「坪井出口御門・見付枡形」⇒（棒庵坂）冠木門⇒北大手門⇒本丸
- C 安巳橋（白川）⇒（手取・通丁）⇒厩橋・藪内橋（坪井川）⇒（源之進櫓下坂）  
⇒東ノ二階御門⇒東ノ口三階御門（「近習口」） 近習・裏方などの通用路？遮断施設が少ない
- D 手取⇒厩橋（坪井川）⇒須戸口⇒（竹の丸）⇒元札櫓門⇒本丸 近習・裏方などの通用路

## （2）熊本城防衛の構造

### ◆「（推定）正保城絵図」（「平山城肥後国熊本城廻絵図」他）で考える

\* 正保城絵図は幕府が各藩に提出を命じた絵図。以後、城の新規普請は原則不可となり固定化

- ①本丸は、本丸上段・平左衛門丸・数寄屋丸・飯田丸・東竹の丸で構成⇒「惣石垣」、櫓で囲む
- ②二ノ丸は、西出丸・櫓方・竹の丸で構成（坪井川や大空堀で圍繞）⇒外部への出撃地点となる巨大な「馬出」状の曲輪
- ③本丸と二の丸は、備前濠・本丸空堀・「玉川」（水路）・坪井川に囲まれた完結した防衛空間
- ④三ノ丸は、西出丸西側にあり、高石垣・切岸・空堀で防御された曲輪⇒出入口に上級家臣を配し手防衛を担当させる
- ⑤外縁部の千葉城・漆畑・藤崎台周辺は、侍屋敷に使用
- ⑥加藤清正初期時代の隈本城の古城は、西半側に石垣を用いて隅櫓を置き、東側は白川を利用
- ⑦本丸上段を中心に同心円状に配置された帯曲輪や腰曲輪、その外縁部の侍屋敷・城下に機能分化
- ⑧高石垣・空堀・濠・切岸（人工的崖）・河川が、機能分化の区画ラインとなり求心的構造を形成
- ⑨西大手門が「大手口」⇒西大手門が正式な門、幕府上使を迎える「式礼」の門

## （3）熊本城防衛の特徴と疑問

- ①天守西側に並ぶ平左衛門丸・数寄屋丸・飯田丸は、**並立的な曲輪**。各々虎口と五階隅櫓をもつ
- ②飯田丸と東竹の丸も並立的な配置で階層性が希薄
- ③飯田丸の出入口「西櫓御門」は、縄張りの的には不要な出入口 ⇒飯田丸の役割は何だったのか？

③利用されていない不開門

⇒江戸中期には坂道下の門の前面には隠すような植林。何故？

④東ノ三階櫓下に塀。東竹の丸は北側曲輪と遮蔽されていた。

⇒南側は閉鎖的な空間。元々、竹之丸殿の住まいだったか？

⑤竹の丸東の須戸口は簀戸を置いた簡易な門で使用されず。

⇒構造上、櫓門を置く場所だが細川氏も建造しなかった。

(4) 城門の運用

①惣構え・三の丸・二の丸・本丸の出入口の場所と時間を制限

門の内外の番所・警固所で監視 門は日の出に開け、日の入りに閉鎖

②特に本丸内は「札櫓御門」「手取口門」で札を掲示させて出入りをチェック

③本丸上段（最深部）への出入は耕作櫓（三階）御門・東口三階櫓御門の2箇所限定

\* 小天守北東の石門部分は通路と排水機能があるが、通常は遮断し通行不能

④本丸上段周縁の石垣上建造物は石落としや狭間がある櫓を配列 例：月見御台所の二階櫓

⑤使い分けしていた本丸周りの城門

・式礼ルート上の門

西大手門⇒頬当御門⇒数寄屋丸御門⇒耕作櫓御門⇒闇り御門⇒闇り通路玄関⇒本丸御殿

・「近習口」として日常使った「裏」側の東口三階櫓御門

・不開門や西櫓門は常時には使用せず

(5) 家臣の天守へのルート

\* 御天守方＝御天守奉行（天守や天守内御道具（武器）を管理した部署）の史料「御天守方御間内御絵図」や「御間内御櫓々御順道」を参考

①腰掛御蔵脇「平佐衛門丸入口黒御門」⇒数寄屋丸御門三階⇒「長御櫓」⇒数寄屋丸「五階御櫓」  
⇒「二階御広間」⇒「地蔵御櫓御門」⇒「御天守方口之間」⇒「家老ノ間」⇒「耕作櫓御門」  
⇒「御天守廊下」⇒「御札之間」⇒「御天守廊下」⇒御天守土台⇒天守一階「鉄砲ノ間」

②御弓蔵の「天守方出入口多門」と呼ばれた出入口

「多門」は本丸上段の九曜之間床下などに3ヶ所あり

⇒部外者に判り難い床下を通る小さな出入口（潜り戸？）

③天守への通行は、御天守廊下中途の「御札ノ間」でチェック

建物接続部などに段差や箱段を設ける（櫓内は通常暗闇であることにも留意）

部外者では容易に天守に到達できない仕組み、工夫

3 まとめ

城下構造、城内縄張り、建物配置や機能、門の運用など、緻密な防衛策を駆使

本丸上段に4つの台所、平左衛門丸・飯田丸にも大台所、各曲輪には一つ以上の井戸

**籠城対策を徹底的に図った実践第一の城 ⇒西南戦争で実証**

# 慶長 16 年頃の熊本城と城下

